

研究ノート

情動の視点から見る「移動する子ども」学

川上 郁雄 *

■要旨

幼少期から複数言語環境で成長した人の「経験と記憶」の根底に「感情」「感覚」「情念」の主観的意味世界が関わっているのはなぜかという課題について、生物学・脳科学・哲学の最新研究成果である「移動知」「情動」「自己物語」の諸点から検討した。その結果、幼少期・成長期の空間、言語間、言語教育カテゴリー間の移動と複数言語接触が「ソマティック・マーカーと結びつく基本的、形成的刺激」を生じ、脳——身体——環境のダイナミクスの中で、子ども自身の適応的行動、アイデンティティ形成、子どもの生き方、そして情動の力で紡ぎ出される「自己物語」を生み出す可能性を論じた。以上の検討から、「移動する子ども」学に情動が不可欠な視点であり、情動の視点を取り入れた実践研究の必要性を指摘した。

© 2023. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

■キーワード

移動する子ども、
経験と記憶、
移動知、
情動、
自己物語、
感情・感覚・情念、
ソマティック・マーカー
仮説、
主観的意味世界

1. はじめに

幼少期からの複数言語環境で成長した経験と記憶を探究することは、「移動する子ども」学の重要な研究テーマである(川上, 2021)。特に注目されるのは、幼少期あるいは成長期の空間、言語間、言語教育カテゴリー間の移動の経験である。なぜならそれらの移動の経験と記憶が、子どもの生き方、アイデンティティ形成に大きな影響を与え、かつその後の人生全体にも関わっていくと考えられるからである。

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科 (Eメール: kawakami@waseda.jp)

そのような経験と記憶を、筆者は「移動する子ども」と名付け、「移動する子ども」という分析概念を開発した。これまでこの分析概念を使い、研究を続けてきた。その結果、わかってきたのは、その当事者の「経験と記憶」の根底に、「感情」「感覚」「情念」の主観的意味世界が関わっているということであった（たとえば、川上、2021¹）。

そこで次に浮かび上がる課題は、「移動する子ども」という分析概念によって「幼少期から複数言語環境で成長した人々」の「主観的意味世界」を探究すると、なぜ「感情」「感覚」「情念」に収斂するのかという課題である。本稿は、この課題を考えるための予備的考察である。

2. 人と移動に関わる先行研究

20世紀後半から現在までの人口増加と人口移動の背景には、グローバリゼーション、ポストコロニアリズム、戦争・人の安全保障、環境破壊等の、歴史的・経済的・社会的要因が深く関わっている。その新しい社会現象に、新たな学問的関心や研究方法論の立て直しが求められており、人文社会科学全体のパラダイム転換の流れもある。例えば、社会学者のJ. アーリが「移動」(mobility)を視点にした「移動論的転回」(mobility turn)による「モビリティーズ・パラダイム」を提唱した(Urry, 2007)のはその一つである²。

人の「移動」に関する研究には、J. クリフォードの「traveling cultures」(Clifford, 1997)、W. サフランの「diaspora」(Safran, 1991)、A. アパデュライの「ethnoscapes」(Appadurai, 1996)、H. K. バーバの「hybridity」「in-betweenness」「the third space」(Bhabha, 1994)など多様な視点からの議論があるが、そもそも人の「移動」に関する研究は、100年前にドイツの社会学者、G. ジンメルが「異郷人」について論じた研究(1908/1994)において、「定住者」と「移動する人々」³の関係性に注目した議論まで遡る。ジンメルは、その「関係性」の議論から、社会を構成する諸要素の「相互作用」により社会が成立しており、そこに社会生活の「創発的関係性」が生まれると論じ、さらにその議論の先に「人格的自由」「人格的主観性」があると主

1 「感情」「感覚」「情念」の主観的意味世界については、川上(2021)の「第5章」「第7章」「第9章」参照。

2 現在の歴史学、社会学、文化人類学、国際政治学、文化変容研究、比較教育学、経済学などで「移動」を視点にした研究が進められている（詳しくは、川上、2021の「第2章」参照）。

3 この議論はR. E. パーク(Park)の「marginal man」論(1928)、A. シュッツ(Schuetz)の「stranger」論(1944)へ展開する。

張した(ジンメル, 1976)。これに対して, 前述のアーリは, 「移動」は場所を生み出し, 場所は「ネットワーク資本」により動的に意味づけられ, 人の記憶と情動に結びつけられ, それゆえ, 「移動」は「存在論的かつ認識論的」(Urry, 2007)であると論じた。

したがって, 「移動」の研究とは, 「定住/移住」「不動/流動」等のように二項対立的な捉え方で現象を捉えるのではなく, 「移動」を弁証法的に捉え直し, 人々が生きる社会諸関係の創発的關係性を明らかにすることを通じて, 社会のあり様と, 現代に生きる人々の存在論的かつ認識論的な「人格的主観性」のあり様を探究することとまとめることができるであろう。

3. 「移動する子ども」という経験と記憶

複数言語環境で育つ子どもは, 今, 世界的に増加している。そのため, このような子どもをめぐる, 「移民の子どもの学力」「継承語教育」「統合(インテグレーション)政策」など, 言語習得を含む教育的課題, 社会的課題が各地で議論されてきた。日本国内の教育現場では「日本語指導が必要な子ども」「外国にルーツを持つ子ども」など, 大人の視点による括り方で議論されることが多いが, これらの括り方には子ども自身の視点は弱い。

本節では, はじめに分析概念としての「移動する子ども」の有効性を確認する。その上で, 本稿の課題を提示する。

幼少期より複数言語環境で育つ子どもは「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」の移動の体験(川上, 2011)を積む。幼少期・成長期は子どもが身体力・認知力・知力を発達させる重要な時期であり, そのため, その時期の「空間」移動, 「言語間」移動, 「学び・考える」場・方法間の移動, それらの移動にともなう複数言語による接触とやりとりは, 当該の子どもの他者理解, 自己理解, 社会認識, 世界認識, 主観的意識の形成に大きなインパクトを与える。その結果, これらの「体験」が子どもにとって意味のある経験として意味づけられ, 長く記憶されることになる可能性が高い。

ただし, 前述のアーリの「ネットワーク資本」には, このような意味の「ことばの視点」がない。しかし, 幼少期・成長期に複数言語環境で成長する子どもたちの「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」の移動に「ことばの視点」は欠かせない。なぜなら子ども時代の複数言語使用や複数言語接触の経験と記憶はその人や周りの人にとっても大きな意味をなすと考えられるからである。したがって, 「移動する子ども」とは「移動の経験と記憶」であり, 目の前の

子どもという「実体概念」ではなく、「分析概念」「関係概念」⁴であると言えよう。

では、分析概念「移動する子ども」を通じて、複数言語環境で成長した人の「移動の経験と記憶」を探究する研究、すなわち「移動する子ども」学は、「移動する時代」の現代において、どのような意味があるのか。「移動する子ども」学は、次の3点において社会に、あるいはアカデミアにこれまでにない貢献ができると考えられる。①複数言語環境で成長する人の成長と生き方、人生、アイデンティティに関わる点、②複数言語環境で成長する人の「移動の経験と記憶」に関わる意味づけが歴史、社会、時代と交差する領域を提示する点、③人口の流動化・ネットワーク環境の発展・AIを含むテクノロジーの進化により、空間的にも地域的にも世代的にも多様な移動現象が発現している21世紀に生きるすべての人々の生のあり様を理解する点、の3点である。

このような学問的な貢献を構想しながら、筆者はこれまで多くの人々の「人格的主観性」のあり様を「移動する子ども」という分析概念を使用して探究してきた。その中で有効な方法論が複数言語環境で成長した人のライフストーリー／オートエスノグラフィの分析である。その分析の結果から見えてきたことは、前述したように、複数言語環境で成長した人の「移動の経験と記憶」の根底に当事者の「感情」「感覚」「情念」を含む主観的意味世界があるということであった。本稿では、なぜ当事者の「移動の経験と記憶」の根底に「感情」「感覚」「情念」を含む主観的意味世界に関わるのかということ、言語教育の視点からではなく、生物学あるいは脳科学の最新成果を踏まえて考えたい。

4. 移動知

生物はどのようなメカニズムで「適応的行動」⁵を生成することができるのか。このテーマは、「物理的実体としての身体」と「制御器としての脳」との関係で捉えることができるが、未だに身体が先か、脳が先かは明確になっていない。しかし、身体が動くことと脳の働きには強い相関があることは広く認められている。その中で近年注目されているのが、移動によって生み出さ

4 ここでいう「関係概念」とは、「経験と記憶」が個のものというより、親や家族、学校の教師やクラスメイト等との社会的関係の中で形成され、相互作用の関係性、それゆえ動態的・複合的な関係性にあることを捉える概念という意味である。

5 「適応」とは「無限定な(限定されていない)状況や環境においても、適切で安定した行動を行うことができる能力」をいう。以下、この節の内容は主に浅間ほか(2010)を参照した。

れる身体・脳・環境との相互作用⁶の観点から「適応的行動」のメカニズムを解明しようとする研究である。その研究の核心が、「移動知」(Mobiligence)⁷に関する研究である。

人は移動によってどのような情報が得られ、どのように行動をとるのか。浅間ほか編(2010)によると、次の3つがあるという。a. 場所の変化にともなう多様な情報, b. 動的(動力学的)情報, そしてc. 経験である。a, bによって得られた情報が経験として脳に蓄積され、将来の行動生成に活用される。したがって、「生きること」は、生命システム(人)が(予測限界、観測限界を超えて)「無限定な環境と調和的な関係を自律的に創り出すこと」であると捉えられるという。このような捉え方をすると、無限定な環境にある生命システムが、自律的に環境と調和的な関係を創るための必要十分条件となる「生命システムの論理」を探究することが研究領域として浮上し、それが、「適応脳科学」と呼ばれる研究領域であるという。

地球上に人が誕生し、環境に適応していくことは、「脳の進化」と密接に関係するのである。その「脳の進化」は、新生児の脳の成長・発達にも関連している。現在の脳科学研究では、脳のうち「古皮質」と呼ばれる部位は本能的欲求、基本的生命機能を司る部位と言われる。この部位は生後3ヶ月の間に発達し、脳幹、脊髄、基底核となる部分である。また「旧皮質」と呼ばれる部位は、たくましく生きる「感情や情動」を司る部位と言われる。この部位は生後10ヶ月ほどで発達し、大脳辺縁系を形成する。「大脳皮質(新皮質)」は思考や創造など「理性」を支える。それは生後15ヶ月ほどに形成されるという(浅間ほか編, 2010)。

このように人は誕生後から「大脳皮質(新皮質)」が高度に発達していくが、古皮質、旧皮質と「相互作用」することで脳の高次機能が発揮されていく。また、理性・社会性・認知・言語・道徳などに関わる大脳皮質による高次機能は、情動や意識などに関わる大脳辺縁系(旧皮質)や脳幹(古皮質)を基盤としている⁸と言われる(浅間ほか, 2010)。

人は行動することによって、脳-身体-環境の間に動的な相互作用を生じさせ、身体の媒介のもとで固有の環境世界を自身の内部に取り込む(これを内部モデル internal model という)。この時の脳と身体との相互作用は「内部ダイナミクス」、身体と環境の相互作用は「外部ダ

6 H17(2005) 科研費特定領域研究:「身体・脳・環境の相互作用による適応的運動機能の発現——移動知の構成論的理解」(別名:「移動知研究」)。脳科学, 神経生理学, 生物学, ロボット工学等の学際的研究。

7 認知主体が動くことで生じる「身体」と「脳」と「環境」の動的な相互作用によって、適応的に行動する知が発現するという、創発的知能の形態やその考え方をいう。

8 言語処理には主にブローカ野とウエルニッケ野という大脳半球の部位が関わる。

イナミクス」と呼ばれることがあるが、この二つのダイナミクスの動的関係を目的・タスクに適合した特性に自ら調整することが適応行動制御の本質⁹と考えられる¹⁰。

ここで注目されるのは、「無限定な環境と調和的な関係を自律的に創り出す」という環境世界に対する適応行動を取る際、情動の動きが先にあるという点である。次に、記憶を使った情報処理や理性の動きが生まれる。その結果、人のような高等動物の行動は記憶機能を獲得することで適応方法が豊かに、そして多様になった。このことは、情動としての機能が極めて重要な役割を果たしているということの意味する。

では、情動とは何かという疑問が出てくる。次に、情動について考えていく。

5. 情動

まず、森を歩いていて、へびに遭遇したとしよう。その時、「怖い」と感じるから、心臓がドキドキするのか、それとも「怖いもの」を見て心臓がドキドキする「身体的変化」があるから、「怖い」と感じるのか。このメカニズムを、神経学者の A. R. ダマシオ (Damasio) は「まず、情動があり、感情はそのあと」と主張する。この情動 (emotion) は見る、聞く、触るなどによって生じる身体的変化が身体記号 (神経記号/化学信号) によって脳¹¹にモニターされマッピングされた身体的反応のこと¹²と、ダマシオは説明する。また、感情 (feeling) は、身体記号によって脳内に報告され、それに対応して生成される心的パターン (イメージ)¹³であるという。したがって、情動は、生命史において感情より先に誕生したともいう。

これがダマシオの「ソマティック・マーカー仮説 (somatic marker hypothesis)」である。ソ

9 「脳-身体」(内部ダイナミクス)と「身体-環境」(外部ダイナミクス)の間でどのような「指令と出力の関係」にあるかは未解明の研究課題となる。

10 この論点は、認知心理学のスキーマ・スクリプト論やアフォーダンス理論、社会学の「橋と扉」の議論 (ジンメル, 1976)、言語教育のマルチ・モーダル研究とも関連する。

11 情動は、脳の前頭前・腹内側皮質、前脳基底部、扁桃体などに関わる。

12 怒り、恐怖など、生体の生き残りのために進化的に形成され、脳にモジュールとして組み込まれているシステム。情動は生得的であるが、すべての情動が誕生後にただちに機能するようになっているかは情動による。例えば、サルがへびに恐怖を感じるのは、母ザルの恐れを体験することが必要であるように、「一度の経験」なしに「生得的な」行動も機能しない (ダマシオ, 2005, pp. 74-75)。

13 ただし、「有機体が感情を持つことと、感情を感じることは異なる」とダマシオは言う (ダマシオ, 2005)。また、feeling を「情緒」、それらを含む上位概念の affect を「感情」と訳す場合もある (大平, 2014)。

マティック・マーカとは「意思決定に影響する身体信号¹⁴とその状態」をいう。

ここでいう「意思決定」とは、人としての「生命システム」を維持するための「適応的行動」の判断を言う。

ダマシオは次のように主張する。まず、「身体的反応は、無自覚的に生じる」という。身体の外部、内部の刺激を受けた身体状態の調節と表象は意識的熟考なしに自動的に作動するということである。その上で、情動を、以下の3つの情動（以下の a, b, c）が入れ子構造に形成されるという。a. 背景的情動 (background emotions) は、「緊張している」、「ピリピリしている」、「やる気がない」、「熱中している」、「落ち込んでいる」、「快活である」などのように、口に出さずともこれらの状態を感じている時の情動をいう。「細かい身体の姿勢」、「身体の動きの速さや調子」、「眼球運動の量や速さ」、「顔面筋肉の収縮のわずかな変化」など豊かな身体的変化として現れる。b. 一次的情動 (primary emotions) は、誕生後の早い時期に経験する生得的なもので、喜び、悲しみ、恐れ、怒り、驚き、嫌悪を指す。それに対して、c. 社会的情動 (secondary emotions) は二次的とも言えるもので、後天的な個の特有の経験から生まれるゆえに社会的情動と言われる。例えば、共感、当惑、恥、罪悪感、プライド、嫉妬、羨望、感謝、賞賛、憤り、軽蔑等がある。社会的状況における経験と記憶と学習から生まれる反応¹⁵をいう（ダマシオ、2003, pp. 56-112；ダマシオ、2005, pp. 50-115）。

この3つの情動が入れ子構造に形成される。この情動の入れ子構造を基盤として、外的な誘発因（光景、事物、状況等と、そこから引き起こされる記憶など）から「ひそかに誘発される外向きの情動」と「最終的に認識される内向きの感情」が生まれる。ただし、ここで重要なのは、情動の後に生まれる感情はすべて意識されるとは限らないということである。「基本的生命調節」（有機体が生命を維持するために必要な調節）→「情動」→「感情」と繋がるが、これが次の段階の「意識」に上るかどうかはわからない。逆に、「感情」→「情動」→「基本的生命調節」という流れもありうる。すべての「基本的生命調節」、「情動」、「感情」が「意識」されているわけではないが、これらの「調節」や「情動」、「感情」、「意識」が活性化する、つまり多様に反応することによって、有機体（人）の適応的に反応する能力が強化され、生存へ向けられ

14 ギリシャ語で「身体」を意味する soma から、somatic（身体の）と marker（記号）を合成したダマシオの造語。この説はまだ仮説であり、関連する議論は世界各地で続いている（大平、2014）。

15 「情動は、一つのパターンを形成する一連の複雑な化学的、神経的反応である」（ダマシオ、2003, p.76）という。

ていくことになる(ダマシオ, 2003, pp. 56-112)。

さらに、ダマシオは、「感情」は過去の記憶、イマジネーション、推論と連携し、将来を見通し、小説を創作するなど、非定型的な反応をもたらす(ダマシオ, 2005, p. 115)と述べる。

このようにダマシオの仮説とは、「身体的変化が身体記号(神経記号)によって脳に伝達され、身体的反応や感情、経験が参照され、意思決定を誘導する」という仮説なのである。このダマシオの仮説が、幼少期より複数言語環境で成長する子どもの「経験と記憶」の探究にどう関わるかについては、次節で検討するが、その前に情動についての哲学的研究を見てみよう。なぜなら、上記のダマシオの主張を考える上で示唆に富むからである。

哲学者の信原幸弘は「情動の哲学」を論じている(信原, 2017)。情動が人の経験と記憶を語る行為と深く関わると見る。信原は、人が「自分に関係する過去、現在、未来を展望しながら、何をするかを決め、自分の人生を紡ぎ出していく」(信原, 2017, p. 221)物語を、「自己物語」¹⁶と呼び、その行為は、「自分の人生に一貫とした意味を与えること」と捉える。その上で、この「自己物語」を語る時「情動はそれに欠かせない重要な役割」(p. 222)を持つと捉える。なぜか。

信原(2017)は「自己物語」に必要なものとして次の3つの特性を指摘する。①「行為者性」(物語には登場人物がいる。心の動きを語る。)、②「視点性」(登場人物の視点、語り手の視点、聞き手の視点が必要)、③「評価性」(評価的視点から、語り手は情動的な評価、判断的评价を与える。)

語り手の情動や価値判断が語られる内容が「自己物語」に投影される。(信原, 2017, p. 237)。したがって、信原(2017)は、「私たちは情動の力で自己物語を紡ぎ出しながら、その物語を生きていく。(中略)私たちは情動能力の範囲内で可能な自己物語を生きるしかない」(p. 247)と主張する。

16 近年、自己、自己性を社会的な文脈で捉える試みとして、自己エスノグラフィ(autoethnography)が研究方法論として様々な研究領域で注目されている。例えば、文化人類学では「特集：オートエスノグラフィで拓く感情と歴史」『文化人類学』(Vol. 87(2), 2022)を組んでいる。しかし、本稿では、ethno: 集団や文化の信念、慣行とアイデンティティを結びつける視点をとっていない。

6. 考察

本節では、前節までに見てきた生物学、脳科学、そして哲学の最新成果が、幼少期より複数言語環境で成長する子どもの「経験と記憶」(移動する子ども)とどのように関わるのかを考察してみたい。

まず確認したいのは、21世紀の時代性である。前述の「移動する時代」「移動論的転回」「モバイル・ライブズ」という視点から見ると、幼少期より複数言語環境で多様な移動と多様な変化に晒されながら成長する子どもが、世界各地にあり、その成長過程で「人格的主観性」(ジンメル, 1976)が形成されていくという時代性があるという点であろう。

その上で、この時代性の中で、人は誕生した時から、無限定な環境と調和的な関係を自律的に創り出すという「移動知」があるという指摘は、極めて重要な視点になる。

さらに、その環境に対する人の適応的行動は、脳-身体-環境のダイナミクスに関連する。そして、そのダイナミクスの中で、情動は、脳の基底的部位に関連し、感情、記憶、思考の基盤となる(ダマシオの仮説)。また、社会的情動とは、他者、社会、環境等との相互作用、外的影響を受ける(同)。

これらの知見を踏まえて考えると、幼少期より複数言語環境で成長する子どもは、「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」の多様な移動とそれらの移動にともなう複数言語による接触とやり取りを経験する時、子どもはその動的で無限定な環境と調和的な関係を自律的に創り出すという「移動知」を日々経験し蓄積しつつ、その環境に対する子ども自身の適応的行動が、脳-身体-環境のダイナミクスに関連して生成されるということになる。

ダマシオは、動的な環境の中で、人の「身体的変化が身体記号によって脳に伝達され、身体的反応や感情、経験が参照され、意思決定を誘導する」とした上で、「ソマティック・マーカーと結びつく基本的、形成的刺激は、まちがいなく幼児期、思春期に獲得される」と述べており、かつ「刺激の増加は死ぬまで続く」し、「継続的な学習のプロセス」であるともいう(ダマシオ, 2010, pp. 280-281)。

さらにダマシオは、「感情は過去の記憶、イマジネーション、推論と連携し、将来を見通し、小説を創作するなど、非定型的反応をもたらす」(ダマシオ, 2005, p. 115)と述べている¹⁷。

17 このダマシオの論点は「移動する子ども」と文学というテーマにつながる(川上, 2022)。

このように、幼少期より複数言語環境で成長する子どもは、単言語環境の子どもより、より多くの「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」の移動とそれらの移動にともなう複数言語による接触とやり取りを経験することによって、そこから生じる多様な環境変化に晒され、その中で多様な身体的変化を体験し「ソマティック・マーカーと結びつく基本的、形成的刺激」を受けていると考えられるのではないか¹⁸。

また、ダマシオが言うように、情動が脳の基底の部位に関連し、感情、記憶、思考の基盤となり、他者、社会、環境等との相互作用・外的影響から社会的情動が生じ、結果として、脳内に、予測を含む能動的な内的モデル (internal model) が生まれ、情動が生じた後に感情が、そして感情に起因する思考が生じ、感情は過去の記憶、イマジネーション、推論と連携し、将来を見通し、小説を創作するなど、非定型的反応をもたらす(ダマシオ, 2005, p. 115) と考えると、幼少期より複数言語環境で成長する子どもの移動の経験と記憶が、信原のいう「自己物語」に反映するのは至極当然と言えよう。

前述の「適応脳科学」では、「生きること」は生命システムが(予測限界、観測限界を超えて)「無限定な環境と調和的な関係を自律的に創り出すこと」であると捉えられる。この点を踏まえて、複数言語環境で生きる子どもの場合を考えると、これらの子どもは人としての「生命システム」を維持していく際に自身の予測を超えた多様な音や動作や匂いや味やまなざしなど外的刺激を含む環境に晒されて「無限定な環境と調和的な関係を自律的に創り出すこと」を余儀なくされることになる。

例えば、ドイツ人の父と日本人の母のもとドイツで生まれ教育を受けたマユミさんが10歳で日本に来て学校に入り、日本の大学を出て、再びドイツに戻り、大学院教育を受けて仕事をし、ドイツ人男性と結婚してドイツで子育てをするというライフストーリー(川上, 2021)に幼少期からの複数言語環境と移動に子どもながらも「調和的な関係を自律的に創り出す」努力を重ねた苦しい「移動の経験と記憶」が色濃く反映されていた。また、朝鮮籍の父と日本人の母のもと長野県で生まれた映画監督の崔洋一さんは、幼少期からのキムチの匂いや朝鮮半島の方言の音、朝鮮学校での朝鮮語教育の経験と記憶がその後の映画監督の仕事に大きく影響していたことを語るライフストーリー(川上, 2021)にも、幼少期・成長期の複数言語環境への適応的行動が崔さんの人としての「生命システム」を維持していくことにつながったことが窺わ

18 この論点は、例えば、「ハーフ」の娘の名前をめぐる母娘の語りにも見られる(Miyake Mark・三宅, 2022)。

れる。

つまり、マユミさんの語りにも崔さんの語りにも、「無限定な環境と調和的な関係を自律的に創り出す」それぞれの適応的行動に、それぞれの情動の形成と「自己物語」の生成が関連していたと考えられるのではないか。

この情動の形成と「自己物語」の生成が環境への適応的行動であり、人生全体に関わると捉えると、「移動する子ども」という経験と記憶は、幼少期・成長期から生成され、その後の人生のどこにおいても発現すると考えられるのではないか。これまでの「移動する子ども」研究において、幼少期より複数言語環境で成長した経験を持つ大人のライフストーリーが多く分析されてきた(川上, 2018, 2021, 2022)。その「移動の経験と記憶」の分析から浮かび上がったのは、「感情」「感覚」「情念」を含む主観的意味世界(川上, 2021)だった。前述の脳神経学・情動に関する研究では、子どもの誕生後の15ヶ月までの脳の発達と、成人の脳が研究対象となるケースが多かった。幼少期・成長期の子どもの脳と情動の発達過程に、「移動の経験と記憶」、つまり〈移動する子ども〉がどのように関連しているのかはまだ十分に開拓されておらず、今後検討されるべき広大な研究領域と言えるのではないか。

7. 展望と課題

では、最後に、この研究領域が、なぜ「子どもの教育」や「ことばの研究」に重要なのかを検討してみよう。ここでは、「日常の相互活動が行われている「場所」に蓄積・存在する(使用可能な)資源の総体」(尾辻, 2022b, p. 191)を意味する「場所のレパートリー」を用いて論じた尾辻恵美の最近の論考に注目する。

尾辻(2022a)の「湯呑の貫入に投げ込まれた「移動とことば」と題された論考には、尾辻自身の生い立ち、幼少期の英国エジンバラでの経験、幼少期からの移動の経験を軸にしたライフストーリーが提示されている。この論考で尾辻は、アメリカで生まれたあと、小学校時代に過ごした英国エジンバラでの記憶を語る。秋の夕方の薄暗さ、高低差のあるイントネーションなど、「歴史、ことば、匂い、色が一体となった時空間を超えた記憶が今でも蘇ってくる」と述べている。この経験と記憶が、尾辻が博士論文を書く頃に使った実家の部屋や父が使った机、父が使った湯呑と繋がっており、のちに「モノ(チリのワイン、食べ物、ピアノ)、匂い、歴史、地理というものが、言語行動の描写に不可欠なその「場所」で絡み合う要素として取り上げら

れて」(p.53) いくというメトロリンガリズム研究の着眼点へ進んだことが論じられる。つまり、幼少期からの移動の中で、五感で感じた様々な事柄と記憶に自らのアイデンティティ形成そのものを感じ取っているのである。本稿で述べた「情動」が尾辻自身の語る自らのアイデンティティの感覚に密接に関連することが窺える。

尾辻(2022b)の「昆布に分散化されたアイデンティティ」と題された、もう一つの論考では、「シドニーに暮らす高齢の日本人女性のライフストーリー」が提示される。この高齢女性が幼稚園生だった時に初めて口にしたチョコレートクッキーの味や匂い、銀紙の感触の記憶、宝塚公演の強烈な記憶が語られ、さらに大人になってから渡豪した当時の記憶、シドニーの自宅にある器、モノ、DVD、莫大な数の歴史や古典の本や、パントリーに貯蔵された、日本で買い出しされた高級昆布、胡麻油、調味料が描写され、これらの「場所にある様々な資源と複雑に絡み合う相互関係の中から、ことば、意味、アイデンティティが生まれる」(p. 199)として、それを「昆布に分散化されたアイデンティティ」と呼ぶ。つまり、「場所にある様々な資源と複雑に絡み合う相互関係の中から、ことば、意味、アイデンティティが生まれる」として、「モノやセンスをも含む人間の外に存在するセミオティック資源との相互関係の中から形成され、そのセミオティック資源にも、人間のアイデンティティは分散され投影されている」(p. 199)と結論づける。しかし、この高齢女性のアイデンティティが「昆布に分散化されたアイデンティティ」であるとしても、なぜ昆布やごま油にアイデンティティが分散され投影されるのであろうか。

どちらの論考も、ことば、意味、アイデンティティを中心テーマとして、場所のレパトリー、セミオティック資源、ポストヒューマニズム、ポスト構造主義の多角的な視点から論じられた研究である。どちらの論考の分析結果も興味深いものであるが、前者の論考では、なぜ尾辻自身の移動の語りとアイデンティティ形成が「湯呑の貫入に投げ込まれた」ことと結びつくのか、後者の論考で高齢女性の語りが、なぜ「昆布に分散化されたアイデンティティ」となるかは十分に説明されていない。「湯呑」や「昆布」というモノに当事者のアイデンティティが分散化されていると観察者に見えるから、これらの研究がポストヒューマニズム的研究なのであろうか。むしろ、「湯呑」や「昆布」に当事者のアイデンティティが分散化されているのであれば、その背景に子ども時代からの生活環境や移動の軌跡の中で体験した、脳と情動の発達過程が深く関わっており、そのことにより、これらの二人の女性の「移動の経験と記憶」や信原のいう「自己物語」が生まれてきていると考えられるならば、それこそ、新たなヒューマ

ニズムの研究と言えるのではないか。そう考えると、尾辻の議論に、本稿で述べた「情動」の観点からの検討が加わることで新たな議論へ発展する可能性があると言えるのではないか。

以上のように、幼少期からの複数言語環境で成長した経験と記憶を探究する「移動する子ども」学の重要な研究テーマは、子どもの生き方、アイデンティティ形成、さらにはその後の人生全体に関わる重要な研究領域である。その基本となる「移動する子ども」という分析概念から析出される「経験と記憶」の根底には、これまでの研究で析出された「感情」「感覚」「情念」の主観的意味世界があり、その主観的意味世界は、本稿で検討した「情動」研究と深い関わりがあることは確かであろう。今後の課題は、情動の視点を取り入れた「移動する子ども」学の実践研究の展開であろう。

付記 本稿は「ひと・ことばフォーラム」(2023/2/4)および「JSAA-ICNTJ Conference 2023」(2023/9/3)の口頭発表をもとに作成された。本研究はJSPS 科研費(JP20K00735)による研究成果の一部である。

文献

- 浅間一・矢野雅文・石黒章夫・大須賀公一(編)(2010).『移動知——適応行動生成のメカニズム』オーム社.
- 大平英樹(2014). 感情的意思決定を支える脳と身体の機能的関連. *Japanese Psychological Review*, 57(1), 98-123.
- 尾辻恵美(2022a). 湯呑の貫入に投げ込まれた「移動とことば」. 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば2』(pp. 45-70) くろしお出版.
- 尾辻恵美(2022b). 昆布に分散化されたアイデンティティ. 松田真希子・中井精一・坂本光代(編)『「日系」をめぐることばと文化——移動する人の創造性と多様性』(pp. 187-202) くろしお出版.
- 川上郁雄(2011). 『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版.
- 川上郁雄(2018). 「移動する子ども」からモバイル・ライブズを考える. 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば』(pp. 245-271) くろしお出版.
- 川上郁雄(2021). 『「移動する子ども」学』くろしお出版.
- 川上郁雄(2022). 「移動する子ども」と文学——荻野アンナの文学世界を読む. 川上郁雄・三

- 宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば2』(pp. 219-250) くろしお出版.
- ジンメル, G. (1976). 『ジンメル著作集 12 — 橋と扉』(酒田健一ほか, 訳) 白水社.
- ジンメル, G. (1994). 『社会学 — 社会化の諸形式についての研究』(居安正, 訳) 白水社.
- ダマシオ, A. R. (2003). 『無意識の脳 自己意識の脳』(田中三彦, 訳) 講談社. [原題: *The Feeling of What Happens: Body and Emotion in the Making of Consciousness*, 1999.]
- ダマシオ, A. R. (2005). 『感じる脳』(田中三彦, 訳) ダイアモンド社. [原題: *Looking for Spinoza: Joy, Sorrow, and the Feeling Brain*, 2003.]
- ダマシオ, A. R. (2010). 『デカルトの誤り — 情動, 理性, 人間の脳』(田中三彦, 訳) 筑摩書房. [原題: *Descartes' Error*, 1994.]
- 信原幸弘 (2017). 『情動の哲学入門 — 価値・道徳・生きる意味』 勁草書房.
- Miyake Mark, Laura Sae・三宅和子(2022). 名前をめぐるアイデンティティ交渉 — 「ハーフ」の娘と母の「移動」の軌跡から見えるもの. 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編)『移動とことば2』(pp. 16-44) くろしお出版.
- Appadurai, A. (1996). *Modernity at large: Cultural dimensions of globalization*. University of Minnesota Press. [アパデュライ, A. (2004). 『さまよえる近代 — グローバル化の文化研究』(門田健一, 訳) 平凡社.]
- Bhabha, H. K. (1994). *The location of culture*. Routledge. [バーバ, H. K. (2005). 『文化の場所 — ポストコロニアリズムの位相』(本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美, 訳) 法政大学出版局.]
- Clifford, J. (1997). *Routes: Travel and translation in the late twentieth century*. Harvard University Press. [クリフォード, J. (2002). 『ルーツ — 20世紀後期の旅と翻訳』(毛利嘉孝・有元健・柴山麻妃・島村奈生子・福住廉・遠藤水城, 訳) 月曜社.]
- Elliott, A., & Urry, J. (2010). *Mobile lives*. Routledge. [エリオット, A・アーリ, J. (2016). 『モバイル・ライブズ — 「移動」が社会を変える』(遠藤英樹, 監訳) ミネルヴァ書房.]
- Park, R. E. (1928). Human migration and the marginal man. *American Journal of Sociology*, 33(6). 881-893.
- Safran, W. (1991). Diasporas in modern societies: Myths of homeland and return. *Diaspora*, 1(1), 83-99.
- Schuetz, A. (1944). The stranger: An essay in social psychology. *American Journal of Sociology*,

49(6). 499-507.

Urry, J. (2007). *Mobilities. Polity*. [アーリ, J.(2015). 『モビリティーズ——移動の社会学』(吉原直樹・伊藤嘉高, 訳) 作品社.]